

(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開平7-45016

(43) 公開日 平成7年(1995)2月14日

(51) Int.Cl.⁶

G 1 1 B 21/02

識別記号

庁内整理番号

F I

技術表示箇所

S 8425-5D

R 8425-5D

審査請求 未請求 請求項の数12 O L (全 11 頁)

(21) 出願番号 特願平5-192168

(22) 出願日 平成5年(1993)8月3日

(71) 出願人 000005821

松下電器産業株式会社

大阪府門真市大字門真1006番地

(72) 発明者 光安 利夫

大阪府門真市大字門真1006番地 松下電器
産業株式会社内

(72) 発明者 石橋 真

大阪府門真市大字門真1006番地 松下電器
産業株式会社内

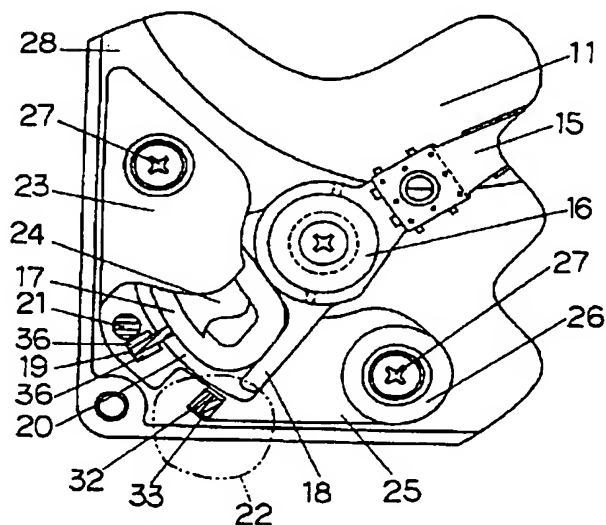
(74) 代理人 弁理士 松村 修治 (外2名)

(54) 【発明の名称】 情報記録再生装置

(57) 【要約】

【目的】 低消費電力で、しかも立ち上がり時間を短時間で行うことができる情報記録再生装置を提供すること。

【構成】 コイル17の外周に磁性ピン19を設けてモールド部20にて磁性ピン19を支持固定する。また磁性ピン19には衝撃吸収材であるダンパー36を装着する。アクチュエータロック機構22は永久磁石であるロック磁石32と下ヨーク25の一部であるロックヨーク33を有する。非動作時、磁性ピン19を介してアクチュエータはアクチュエータロック機構22に保持される。



【特許請求の範囲】

【請求項1】 少なくとも1枚のディスクと、このディスクに対応する少なくとも1個のトランスデューサと、このディスクを回転させるスピンドルモータと、このトランスデューサを支持固定するジンバルと、このジンバルを支持固定するフレキシャーと、このフレキシャーを支持固定するフレキシャー支持固定手段と、このトランスデューサを駆動するコイルと、このコイルを支持固定するコイルホルダと、第1のヨークと、第2のヨークと、この第1のヨークに固定された少なくとも1個の磁石と、この第1のヨークとこの第2のヨークとの間に間隙を形成する少なくとも1個のスタッドと、前記トランスデューサと前記ジンバルと前記フレキシャーと前記フレキシャー支持固定手段と前記コイルと前記コイルホルダとからなるアクチュエータを保持可能なアクチュエータロック機構とを有する情報記録再生装置であって、前記コイルに磁性ピンを支持固定するモールド部と、前記第2のヨークに固定されるロックヨークと、前記磁性ピンを当接保持可能な永久磁石であるロック磁石とを前記アクチュエータロック機構が有することを特徴とする情報記録再生装置。

【請求項2】 前記アクチュエータの揺動範囲を規制する外周ストッパーを具備することを特徴とする請求項1記載の情報記録再生装置。

【請求項3】 前記モールド部が衝撃吸収材であることを特徴とする請求項1記載の情報記録再生装置。

【請求項4】 前記磁性ピンが前記アクチュエータのカウンターウエイトを兼ねることを特徴とする請求項1記載の情報記録再生装置。

【請求項5】 前記磁性ピンが衝撃吸収材を具備することを特徴とする請求項1記載の情報記録再生装置。

【請求項6】 前記ロックヨークが板バネ材であることを特徴とする請求項1記載の情報記録再生装置。

【請求項7】 前記ロックヨークが第1のヨークあるいは第2のヨークにて成形されていることを特徴とする請求項1又は6記載の情報記録再生装置。

【請求項8】 磁石の最外周側より前記磁石の厚み分以上外周にて磁性ピンが支持固定されていることを特徴とする請求項1記載の情報記録再生装置。

【請求項9】 前記フレキシャーが略円形の開口部を有し、かつ前記フレキシャー支持固定手段が、前記フレキシャーを固定するために少なくとも1個の略円形の開口部を有するスペーサーと、前記フレキシャーと前記スペーサーを共に固定せしめるアクチュエータクランプとを有することを特徴とする請求項1記載の情報記録再生装置。

【請求項10】 ディスクを挟む前記フレキシャーを前記ディスクに対し垂直方向からみて異なる位置に配置したことを特徴とする請求項8記載の情報記録再生装置。

【請求項11】 前記ディスク上のシッピング領域を前記

ディスク上の内外周に2ヵ所具備することを特徴とする請求項9記載の情報記録再生装置。

【請求項12】 スピンドルモータの軸受部が流体軸受であることを特徴とする請求項1記載の情報記録再生装置。

【発明の詳細な説明】**【0001】**

【産業上の利用分野】 本発明は、光ヘッドあるいは磁気ヘッドをスライダに搭載した浮上ヘッドを備えた情報記録再生装置に関するものである。

【0002】

【従来の技術】 近年、情報の記録・再生・消去の可能なメモリ素子の開発が進められている。中でも、大容量、高密度記録を特徴とする光ディスク・光磁気ディスク及び磁気ディスク等はその代表的なものである。また、現在では、開発の中心は高速転送や高速アクセスにあるため、記録済みの情報を書き換える場合に、旧情報の消去過程を経ずに、旧情報に重ねて新情報の記録を行う、いわゆるオーバーライト技術の開発が盛んである。

【0003】 このオーバーライト技術の一つとして、例えば、一定強度のレーザ光を照射しながら、磁気ヘッドから印加する外部磁界の向きを記録すべき情報に応じて反転させる磁界変調方式がある。磁界変調方式には、スライダに埋設された磁気ヘッドを板バネなどからなるサスペンションにより光磁気ディスクの表面に付勢して、光磁気ディスクの回転に伴って、光磁気ディスクとの間にほぼ一定の微小間隔を隔てて浮上させる浮上型磁気ヘッドが利用されている。

【0004】 一方、高速アクセスを実現するため、従来の光学ヘッドを小さなスライダ上に集積する方法も考案されている。これは、上記磁気ヘッドと同様のスライダ上にレーザやフォトディテクタなどを集積して、浮上型の光学ヘッドとしたものである。これにより、光学ヘッドが軽量化され、より高速なアクセスが実現可能となるため、現在、開発の最も盛んな技術の一つである。また、この光学ヘッドは、相変化型の記録媒体に用いられるレーザ強度を変調する光変調方式に対しても使用可能である。

【0005】 上記のようなトランスデューサ（光学ヘッド、あるいは磁気ヘッド）を用いた情報記録再生装置において、ディスク上のデータを保護するためにトランスデューサをランディング領域に固定させる場合、アクチュエータの固定にはアクチュエータに直接スプリングを取付け、そのスプリングを用いて非動作時のアクチュエータの固定、及びアクチュエータのリトラクトを行う方法が知られている。

【0006】 また、アクチュエータと連動し、回転する風受けをディスク間に挿入し、ディスクの回転に伴う空気流の力と風受けとを利用して、非動作時のアクチュエータの固定、及びアクチュエータのリトラクトを行う方

法も知られている。

【0007】図18は従来の情報記録再生装置の要部平面図である。この従来例では、非動作時にはトランスデューサ1、フレキシャー2、アーム3、コイル4等からなるアクチュエータは電磁装置6の予圧バネ7によって固定されている。5はディスクである。電磁装置6はアクチュエータ固定用の固定棒8と、予圧力を与える予圧バネ7と、電源投入後固定棒8を引くための可動鉄心9を有しており、情報記録再生装置の電源が投入されると可動鉄心9が引かれ、アクチュエータはフリーとなり、トランスデューサ1を任意の場所に移動させることでデータの記録再生を行う。

【0008】また、樹脂製のディスク基板を用いたディスク駆動装置として、特開平4-67347号公報に記載されたものが知られており、また樹脂製のディスク基板としてポリエチレンテレフタレート等の有機高分子フィルムでディスク厚72 μ m以上（フロッピーディスク相当品）が知られていた。

【0009】

【発明が解決しようとする課題】しかしながら、上記従来の構成では下記の問題点を有していた。

【0010】（1）バネ（スプリング）や風力による外力の影響でトラック移動制御（以後速度制御と呼ぶ）時にアクチュエータモータに印加すべき電流に外力相当分の電流を加減しなければならなかった。

【0011】（2）バネや風力による外力の影響で速度制御からトラック追従制御（以後位置制御と呼ぶ）に切り換わるセトリング時、オーバーシュートやアンダーシュートの発生により、セトリング時間が増長し、データのリード・ライトのためのアクセス時間が長くなっていた。

【0012】（3）上記（2）の問題を解決するために、バネや風力による外力の影響を補正する付加回路、或いはアルゴリズムが必要であった。

【0013】（4）バネや風力にて外力を与える場合、バネや風受けの持つ固有振動数のために、速度・位置制御に有害な機械共振点が発生した。

【0014】（5）電磁装置を用いる場合、通常動作中においても電磁装置に電流を与え続けなければならない、消費電力が大きく、発熱量も大きかった。

【0015】（6）特開平4-67347号公報のものでは、ディスク基板が薄く、かつトランスデューサは負圧接触式であり、ディスク駆動装置内でのディスク配置が設計上において制限されていた。

【0016】（7）ディスクの基板としてアルミニウム合金を用いていたが、小型化による設計スペースの減少により、スピンドルモータの負荷が相対的に増大し、情報記録再生装置の低消費電力化が困難であった。

【0017】そこで本発明は従来のこのような問題点を解決するもので、従来の情報記録再生装置のバネや風力

による外力の悪影響をすべて取り除くとともに、バネや風受けの固有振動数の問題を皆無にし、さらにアクチュエータ固定解除のための消費電力、及び発熱を全くなくすとともに、樹脂材のディスク基板を用いることにより、スピンドルモータの駆動電力の低下、及び情報記録再生装置の起動時間の短縮が可能となる情報記録再生装置を提供することを目的としている。

【0018】

【課題を解決するための手段】本発明の情報記録再生装置は、トランスデューサを駆動するコイルに磁性ピンを支持固定するモールド部と、第2のヨークに固定されるロックヨークと、磁性ピンを当接保持可能な永久磁石であるロック磁石とをアクチュエータロック機構に設けている。

【0019】

【作用】上記構成のように、アクチュエータの固定に永久磁石であるロック磁石を用いることにより、従来の情報記録再生装置のバネや風力による外力の悪影響をすべて取り除くとともに、バネや風受けの固有振動数の問題を皆無にし、さらにアクチュエータ固定解除のための消費電力、及び発熱を全くなくすることができる。

【0020】

【実施例】以下に本発明の実施例を図面を参照しながら説明する。

【0021】（実施例1）図1は本発明の第1の実施例における情報記録再生装置の要部平面図である。

【0022】図1において、ディスク11はスピンドルモータ12にクランパー13を介して回転可能に支持固定されており、トランスデューサ（発光素子・受光素子・偏光ミラー・対物レンズ等をスライダに搭載した光ヘッド）14はジンバル（図示せず）を介してフレキシャー15に支持固定されており、さらにフレキシャー15はピボット軸16に支持固定されている。トランスデューサ14の他端にはトランスデューサ14を駆動するためのコイル17がコイルホルダ18に支持固定されており、磁性ピン19はモールド部20にてコイル17に支持固定されている。トランスデューサ14、フレキシャー15、コイルホルダ18、コイル17等からなるアクチュエータはピボット軸16を回転軸の中心として揺動可能となっており、アクチュエータの揺動範囲は外周ストッパ21とアクチュエータロック機構22にて制御されている。コイル17を駆動させる磁気回路は上ヨーク23と上ヨーク23に接着固定された磁石24と下ヨーク25と2個のスタッド26からなり、スタッド26と下ヨーク25は固定ネジ27にてベース28に固定されている。ベース28とカバー29で密封された環境内を常に清浄な状態に保つために循環フィルター30がベース28に固定されている。

【0023】非動作時、アクチュエータはアクチュエータロック機構22にて固定保持されている。電源投入

後、スピンドルモータ 12 が回転を始め、ディスク 11 が回転することにより、トランスデューサ 14 をディスク 11 上に浮上させる。ディスク 11 上に予め書かれているサーボ・パターンをトランスデューサ 14 が読み出し、そのトランスデューサ 14 からの出力をフレキシブル・プリンティッド・サーキット（以後は FPC と呼ぶ）31 を通してプリンティッド・サーキット・ボード（図示せず、以後は PCB と呼ぶ）へ送る。所望の出力がトランスデューサ 14 から得られると、コイル 17 に電圧が印加され、アクチュエータロック機構 22 から解放されたアクチュエータは所望のトラックへ位置決めできるようになり、情報記録再生装置は使用可能となる。

【0024】このように、アクチュエータを解放するときのみコイル 17 に電圧を印加すれば良いため、情報記録再生装置の通常使用時はアクチュエータロック機構 22 に全く電力消費させる必要がなく、低消費電力の情報記録再生装置が実現可能となる。

【0025】図 2 は本発明の第 1 の実施例における情報記録再生装置のアクチュエータロック機構部分の拡大平面図である。図 2 においてフレキシャー 15、コイルホルダ 18、コイル 17 等からなるアクチュエータは磁性ピン 19 を介してアクチュエータロック機構 22 に固定されている。アクチュエータロック機構 22 はロック磁石 32、ロックヨーク 33、ロック固定ネジ 34 からなり、永久磁石であるロック磁石 32 は接着等によりロックヨーク 33 に固定されており、さらに磁性金属であるロックヨーク 33 はロック固定ネジ 34 にて下ヨーク 25 に固定されている。磁性ピン 19 をアクチュエータに支持固定するモールド部 20 は低反発系の衝撃吸収性を有する合成樹脂であり、アクチュエータのリトラクト時、或いはアクチュエータの暴走時、アクチュエータの加速エネルギーをモールド部 20 が吸収し、トランスデューサ 14（図 1 参照）をヘッドクラッシュ等から保護する。

【0026】図 3 は図 2 の拡大断面図である。上ヨーク 23、磁石 24、下ヨーク 25 等からなる磁気回路はベース 28 とカバー 29 にて洗浄環境に保護されている。アクチュエータは磁性ピン 19 を介してアクチュエータロック機構 22 に保持されている。非磁性の金属ピンである外周ストッパ 21 は下ヨーク 25 に圧入等で固定されている。外周ストッパ 21 に非磁性の金属ピンを使用することにより、磁気回路中の磁束乱れの発生によるギャップ磁束密度の低下を防ぐことが可能となる。さらに、スタッド 26（図 2 参照）2 個と外周ストッパ 21 との 3 点にて上ヨーク 23 を支えるため、磁気回路の安定性が向上する。さらに、図 3 において下ヨーク 25 に外周ストッパ 21 を圧入後、外周ストッパ 21 が下ヨーク 25 の下部に飛び出す突起部を設け、一方ベース 28 側にザグリ部を設け、外周ストッパ 21 の突起部をベース 28 のザグリ部に嵌合させ、下ヨーク 25 を

ベース 28 に取り付けの際の組立性を向上させている。

【0027】（実施例 2）図 4 は本発明の第 2 の実施例における情報記録再生装置のアクチュエータロック機構部分の拡大平面図である。図 4 においてフレキシャー 15、コイルホルダ 18、コイル 17 等からなるアクチュエータは磁性ピン 19 を介して外周ストッパ 21 で受け止められている。

【0028】図 5 は図 4 においてアクチュエータがアクチュエータロック機構に保持された状態を示す拡大断面図である。本実施例では上ヨーク 23 とロックヨーク 33 の組立性を向上させるために、ハーフパンチ 35 を設けている。また、磁性ピン 19 はアクチュエータのバランス取りと、アクチュエータの保持力を調整するために中空となっている。

【0029】図 4、図 5 において、磁気回路の磁束が磁性ピン 19 に及ぼす悪影響を防止するために、磁性ピン 19 は磁石 24 の外周よりもさらに外周側に支持固定されている。本実施例の実験結果によると、図 4 における磁石 24 の外周側 h（図 5 における磁石 24 の厚み h に相当）以上離れておれば、アクチュエータを位置決めする際に、磁気回路の磁束が磁性ピン 19 に及ぼす悪影響は全くなかったことを確認している。また、図 4、図 5 において、磁性ピン 19 の支持固定力を強固なものにするために、磁性ピン 19 は全長の 3 分の 1 以上をモールド部 20 に埋め込まれている。

【0030】（実施例 3）図 6 は本発明の第 3 の実施例における情報記録再生装置のアクチュエータロック機構部分の拡大断面図である。本実施例では上ヨーク 23 とロックヨーク 33 の組立性を向上させるために、ハーフパンチ 35 を 2 力所設けている。また、アクチュエータのリトラクト時、或いはアクチュエータの暴走時、アクチュエータの加速エネルギーをより吸収させるために、磁性ピン 19 はダンパー 36 を具備している。すなわち、リトラクト時はダンパー 36 のみでアクチュエータの加速エネルギーを吸収させ、暴走時はダンパー 36 とモールド部 20 の 2 段の減衰効果を用いて、アクチュエータの加速エネルギーを吸収させている。

【0031】（実施例 4）図 7 は本発明の第 4 の実施例における情報記録再生装置のアクチュエータロック機構部分の拡大断面図である。ロックヨーク 33 はロック固定ネジ 37 にて上ヨーク 23 に固定されている。アクチュエータロック機構 22 はリトラクトを頻繁に行うため、ロックヨーク 33 を板バネとし、通常のリトラクト動作時は磁性ピン 19 に固定されたダンパー 36 のみでアクチュエータの加速エネルギーを吸収させている。さらに、リトラクト時よりも大きなエネルギーを減衰させなければならないアクチュエータの暴走時は板バネを兼ねるロックヨーク 33 と、ダンパー 36 と、モールド部 20 とによる 3 段の減衰効果により、情報記録再生装置の信頼性をより向上させている。

【0032】尚、上記各実施例において、外周ストッパー 21 として非磁性の金属ピンを下ヨーク 25 あるいは上ヨーク 23 に圧入固定していたが、外周ストッパー 21 として樹脂等を下ヨーク 25 あるいは上ヨーク 23 に射出成形しても同様の効果が得られる。

【0033】また、上記各実施例において、アクチュエータの加速エネルギーの減衰方法として、モールド部 20 と板バネを兼ねるロックヨーク 33 との組み合わせ、或いはダンパー 36 と板バネを兼ねるロックヨーク 33 との組み合わせを実施しても同様の効果が得られる。

【0034】（実施例 5）図 8 は本発明の第 5 の実施例における情報記録再生装置のアクチュエータロック機構部分の拡大平面図であり、アクチュエータロック機構 22 を詳細に説明するために、アクチュエータはアクチュエータロック機構 22 に保持されていない。図 8 においてフレキシャー 15、コイルホルダ 18、コイル 17 等からなるアクチュエータは磁性ピン 19 を介して外周ストッパー 21 で受け止められている。

【0035】図 9 は図 8 においてアクチュエータがアクチュエータロック機構に保持された状態を示す拡大断面図である。本実施例では下ヨーク 25 の一部がロックヨーク 33 を構成しているために、ロックヨーク 33 の位置精度を向上させることが可能となるばかりでなく、部品点数も削減可能となるため、情報記録再生装置の組立性が向上し、安価な情報記録再生装置が可能となる。アクチュエータロック機構 22 はリトラクトを頻繁に行うため、ロックヨーク 33 を板バネとし、通常のリトラクト動作時は磁性ピン 19 に固定されたダンパー 36 のみでアクチュエータの加速エネルギーを吸収させているが、リトラクト時よりも大きなエネルギーを減衰させなければならないアクチュエータの暴走時は、板バネを兼ねるロックヨーク 33 と、ダンパー 36 と、モールド部 20 とによる 3 段の減衰効果により、情報記録再生装置の信頼性をより向上させている。

【0036】また、この第 5 の実施例を、図 1 から図 7 に示した各実施例に適用しても本発明の効果が失われることはない。例えば、図 3 に示した第 1 の実施例のごとくモールド部 20 のみにアクチュエータの衝撃吸収をさせる構成や、図 4、図 5 に示した第 2 の実施例のごとくロックヨーク 33 が上ヨーク 23 を支える構成や、アクチュエータのバランス取りとアクチュエータの保持力を調整するために磁性ピン 19 を中空にする構成等にこの第 5 の実施例を適用しても本発明の効果が失われることはない。

【0037】（実施例 6）図 10 は本発明の第 6 の実施例における情報記録再生装置の要部断面図である。

【0038】2 枚のディスク 11 はスピンドルモータスパーサ 41 とクランパー 13 を介し、スピンドルモータ 12 に回転可能に支持固定されている。4 個のトランスデューサ 14 はジンバル（図示せず）を介して各々 4

個のフレキシャー 15 に支持固定されており、さらに 4 個のフレキシャー 15 はアクチュエータスパーサ 42 A とアクチュエータスパーサ 42 B とコイルホルダ 18 とを介し、ピボット軸 16 に支持固定されている。トランスデューサ 14 の他端にはトランスデューサ 14 を駆動させるためのコイル 17 がコイルホルダ 18 に支持固定されている。トランスデューサ 14、フレキシャー 15、アクチュエータスパーサ 42 A、42 B、コイルホルダ 18、コイル 17 等からなるアクチュエータはピボット軸 16 を回転軸の中心として揺動可能となっており、ピボット軸 16 はピボット固定ネジ 43 にてベース 28 に固定されている。コイル 17 を駆動させる磁気回路は上ヨーク 23 と上ヨーク 23 に接着固定された磁石 24 と下ヨーク 25 等からなり、ベース 28 に固定されている。ベース 28 とカバー 29 で密封された環境内は常に清浄な状態に保たれている。

【0039】電源投入後、スピンドルモータ 12 が回転を始め、ディスク 11 が回転することにより、トランスデューサ 14 をディスク 11 上に浮上させる。ディスク 11 上に予め書かれているサーボ・パターンをトランスデューサ 14 が読み出し、そのトランスデューサ 14 からの出力を FPC（図 1 参照）を通して PCB 44 へ送る。

【0040】次に、アクチュエータ部を詳細に説明する。図 11 は図 10 の要部拡大図である。ピボット軸 16 にはクランプ用の開口部 46 が設けられており、この開口部 46 にアクチュエータクランパー 47 を嵌挿させることにより、4 個のフレキシャー 15 とアクチュエータスパーサ 42 A、42 B とコイルホルダ 18 とをピボット軸 16 に支持固定している。また、ピボット軸 16 はピボット固定ネジ 43 にてベース 28 に固定されている。

【0041】このように、従来のアームを使用せず、フレキシャー 15 とスパーサであるアクチュエータスパーサ 42 A、42 B、コイルホルダ 18 を交互に積層することにより、アクチュエータの薄型化が図れるばかりではなく、情報記録再生装置自体の薄型化が図れることになる。

【0042】また、トランスデューサ 14 の厚みの違いによるアームの再設計の必要がなくなり、アクチュエータスパーサ 42 A、42 B、コイルホルダ 18 等の厚みのみを変更すれば良く、新機種の開発納期が短縮できるばかりでなく、フレキシャー 15 等は部品の共通化が可能となり、情報記録再生装置のローコスト化も図れることになる。

【0043】（実施例 7）図 12 は本発明の第 7 の実施例における情報記録再生装置の要部拡大断面図であり、図 11 との違いは、アクチュエータクランパー 47 A としてシー・リングを用いた点である。このようにアクチュエータクランパー 47 A としてシー・リングを用いて

も情報記録再生装置の薄型化が図れるものであり、またフレキシャー15とスペーサーであるアクチュエータスペーサー42A、42B、コイルホルダ18等との間を接着剤等で固定してもよいものである。

【0044】図13は本発明の第7の実施例における情報記録再生装置のアクチュエータ部分の分解図である。このアクチュエータは、ピボット軸16、トランスデューサ14とフレキシャー15とマウント51等からなるHGA UP（ヘッド・ジンバル・アッセンブリ・アップ）52A、コイル17と磁性ピン19とが接着固定されるコイルホルダ18、ディスクに対する取付方向がHGA UP 52Aと反対のHGA DOWN（ヘッド・ジンバル・アッセンブリ・ダウン）52B、アクチュエータスペーサー42B、HGA UP 52A、アクチュエータスペーサー42A、HGA DOWN 52B、アクチュエータクランパー47から構成されている。

【0045】図14は本発明の第7の実施例における情報記録再生装置のHGAを説明する分解図である。フレキシャー15は厚み約80 μ mのステンレス系のバネ材であり、トランスデューサ14を支持固定するジンバル部53はHGAの共振点を向上させるために、フレキシャー15を部分エッチングにて約40 μ mの厚さに成形されている。トランスデューサ14のリード線54を保護するチューブ55を固定するためにカシメ用のツメ56がフレキシャー15に設けられており、フレキシャー15をアクチュエータに固定する際に補強材として、約0.2mmのマウント57がレーザー溶接等にてフレキシャー15に取り付けてある。

【0046】このように、本実施例のHGAを用いることにより、従来のようにHGAをアームに固定するためのカシメ部の高さが不必要となるため、HGAの薄型化が可能となるばかりでなく、アクチュエータの薄型化、情報記録再生装置の薄型化が可能となる。尚、本実施例ではフレキシャー15の補強材としてマウント57を使用した、マウント57を省くことにより、情報記録再生装置の薄型化が図れるとともに、情報記録再生装置のさらなるローコスト化も可能となる。

【0047】また、図14において、HGAの共振点を向上させるためにジンバル部53はフレキシャー15と同一材の部分エッチングであったが、従来のバネ材をスポット溶接等にてフレキシャー15に固定されたジンバルであってもよいものである。

【0048】（実施例8）図15は本発明の第8の実施例における情報記録再生装置の要部平面図である。ここで、特開平4-67347号公報のものでは、ディスクのベース材としてポリエチレンテレフタレートを用い、ディスク厚み72 μ m以上のものを用いていたが、本実施例においてディスク11の基板は熱可塑性の樹脂であるポリカーボネイトであり、厚み約0.7mm、直径約48mm（1.8インチ）である。トランスデューサ1

4、フレキシャー15等からなるHGA DOWN 52Bはディスク11の表面に配置され、HGA UP 52Aはディスク11の裏面に配置され、ディスク11の反りを許容するためにHGA DOWN 52BとHGA UP 52Aは θ の角度を持って配置されている。本実施例では情報記録再生装置の信頼性と組立性を向上させるために、 θ の角度を65度に設定している。

【0049】アルミニウムの比重は約2.7g/cm³、ポリカーボネイトの比重は約1.3g/cm³である。ディスク11の基板形状が同一形状であると仮定すると、ディスク11の基板材料をアルミニウムからポリカーボネイトに変更することにより、スピンドルモータ12にかかる負荷は起動時、定常回転時とともに約半減する。ここで、スピンドルモータ12にかかる負荷は、90%がディスク11のイナーシャ（慣性モーメント）である。すなわち、電源投入後からディスク11が定常回転に達するまでの時間であるスピンドルモータ12の起動時間を本発明の情報記録再生装置では半減することが可能となる。

【0050】さらに、ディスク11が定常回転時、スピンドルモータ12の定常負荷が半減されるため、スピンドルモータ12の駆動電流を半減することが可能となるため、低消費電力の情報記録再生装置の実現が可能となる。

【0051】尚、本実施例ではディスク11の反りを許容するためにHGA DOWN 52AとHGA UP 52Bは θ の角度を持って配置されていたが、ディスク11の厚み如何によっては、図1に示すように θ の角度を0度にしても良い。具体的には、ディスク11基板の直径が48mmの場合、基板厚み0.7mm以上であれば図1に示すように θ の角度を0度としてもディスク11の反りは許容内であったことを実験にて確認している。

【0052】（実施例9）図16は本発明の第9の実施例における情報記録再生装置の要部平面図である。

【0053】ここで、本実施例においてディスク11の基板は熱可塑性の樹脂であるポリカーボネイトであり、厚み約0.7mm、直径約48mm（1.8インチ）である。またディスク11の表面にはHGA DOWN 52B用の内周のシッピング領域61とディスク11の裏面にはHGA UP 52A用の外周のシッピング領域62が用意されている。これらのシッピング領域61、62においてトランスデューサはCSS（コンタクト・スタート・ストップ）を行いデータの信頼性を向上させている。

【0054】尚、本実施例ではシッピング領域61、62をディスク11上の表裏に各々1本設けたが、シッピング領域61、62をディスク11上の表裏に内外周2本設けてもその効果は失われることはない。

【0055】また、本実施例ではディスク11の基板は熱可塑性の樹脂であるポリカーボネイトを用いたが、熱

硬化性の樹脂であるポリカーボネイトをディスク11の基板とした場合も同様の効果が得られることを実験にて確認している。さらに、ポリエチレン等をディスク11の基板とした場合も同等の効果が得られることを実験にて確認している。

【0056】さらに、特開平4-67347号公報のものでは、ディスクのベース材としてポリエチレンテレフタレートを用い、ディスク厚み72 μ m以上のものを用いていたが、ディスクの厚みが薄すぎるため、ディスクとカバーとの距離と、ディスクとベースとの距離がほぼ同等としなければならない制約が存在している。しかし、本実施例ではディスク11の厚みを0.7mmとしているため、ディスク11とカバー29との距離と、ディスク11とベース28との距離の制約は存在しない。従って、情報記録再生装置内でのディスクの配置が制限されないことになり、設計の自由度が高くなっている。

【0057】(実施例10)図17は本発明の第10の実施例における情報記録再生装置の要部断面図である。

【0058】1枚のディスク11はスピンドルモータベース41とクランパー13を介し、スピンドルモータ12に回転可能に支持固定されている。2個のトランスデューサ14はジンバル(図示せず)を介して各々2個のフレキシャー15に支持固定されており、さらに2個のフレキシャー15はコイルホルダ18を介し、アクチュエータクランパー47にてピボット軸16に支持固定されている。トランスデューサ14の他端にはトランスデューサ14を駆動するためのコイル17がコイルホルダ18に支持固定されている。トランスデューサ14、フレキシャー15、アクチュエータクランパー47、コイルホルダ18、コイル17等からなるアクチュエータはピボット軸16を回転軸の中心として揺動可能となっており、ピボット軸16はピボット固定ネジ43にてベース28に固定されている。コイル17を駆動させる磁気回路は上ヨーク23と上ヨーク23に接着固定された磁石24と下ヨーク25等からなり、ベース28に固定されている。

【0059】本実施例ではスピンドルモータ12の軸受けとして、従来のコロ軸受けとは異なる流体軸受けを使用し、スピンドルモータ12内部の磁気回路空間を大きく取ることにより、情報記録再生装置の低消費電力化を実現している。また、流体軸受けを用いることにより、スピンドルモータ12のシャフトを直径約5mmまで設計可能となるため、情報記録再生装置の衝撃に対する信頼性も向上している。

【0060】尚、上記各実施例において、トランスデューサ14として光ヘッドを例として説明したが、磁気ヘッドでもよいものである。また、コンパクト・ディスク・ドライブ等のリード・オンリー・メモリー装置の情報記録再生装置に適用してもよいものである。

【0061】

【発明の効果】本発明によれば、バネや風力による外力の影響でトラック移動制御時にアクチュエータモータに印加すべき電流に外力相当分の電流を加減しなくてよく、またバネや風力による外力の影響で速度制御からトラック追従制御に切り換わるセtring時、オーバーシュートやアンダーシュートの発生によるセtring時間の増長を防ぐことが可能となり、またバネや風力による外力の影響を補正するための回路構成やアルゴリズムは必要なくなる。さらには、バネや風力にて外力を与える場合、バネや風受けの持つ固有振動数のために、速度・位置制御に有害な機械共振点が発生しなくなり、また電磁装置を用いないため、消費電力と発熱量を最小限に抑えられるようになる。また特開平4-67347では、ディスク基板が薄く、かつトランスデューサは負圧接触式であり、ディスク駆動装置内でのディスク配置が設計上において制限されていたが、その制限がなくなり、またスピンドルモータの負荷が半減し、短時間な起動時間と低消費電力化が可能となる。

【図面の簡単な説明】

【図1】本発明の第1の実施例における情報記録再生装置の要部平面図

【図2】本発明の第1の実施例における情報記録再生装置のアクチュエータロック機構部分の拡大平面図

【図3】図2の拡大断面図

【図4】本発明の第2の実施例における情報記録再生装置のアクチュエータロック機構部分の拡大平面図

【図5】図4においてアクチュエータがアクチュエータロック機構に保持された状態を示す拡大断面図

【図6】本発明の第3の実施例における情報記録再生装置のアクチュエータロック機構部分の拡大断面図

【図7】本発明の第4の実施例における情報記録再生装置のアクチュエータロック機構部分の拡大断面図

【図8】本発明の第5の実施例における情報記録再生装置のアクチュエータロック機構部分の拡大平面図

【図9】図8においてアクチュエータがアクチュエータロック機構に保持された状態を示す拡大断面図

【図10】本発明の第6の実施例における情報記録再生装置の要部断面図

【図11】図10の要部拡大図

【図12】本発明の第7の実施例における情報記録再生装置の要部拡大断面図

【図13】本発明の第7の実施例における情報記録再生装置のアクチュエータ部分の分解図

【図14】本発明の第7の実施例における情報記録再生装置のHGAを説明する分解図

【図15】本発明の第8の実施例における情報記録再生装置の要部平面図

【図16】本発明の第9の実施例における情報記録再生装置の要部平面図

【図17】本発明の第10の実施例における情報記録再

生装置の要部断面図

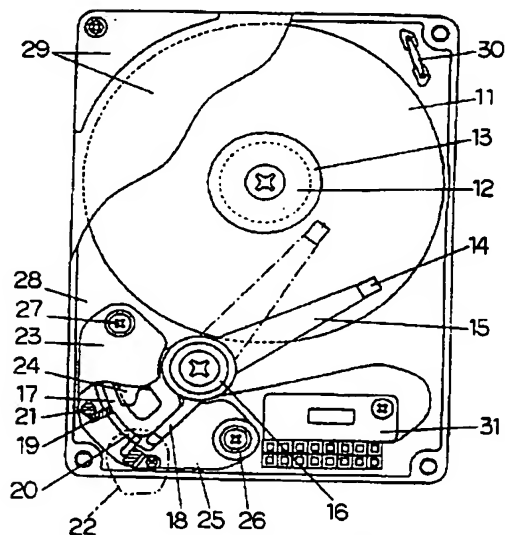
【図18】従来の情報記録再生装置の要部平面図

【符号の説明】

- 11 ディスク
- 12 スピンドルモータ
- 13 クランパー
- 14 トランスデューサ
- 15 フレキシャー
- 17 コイル
- 18 コイルホルダ
- 19 磁性ピン
- 20 モールド部
- 21 外周ストッパー
- 22 アクチュエータロック機構
- 23 上ヨーク
- 24 磁石

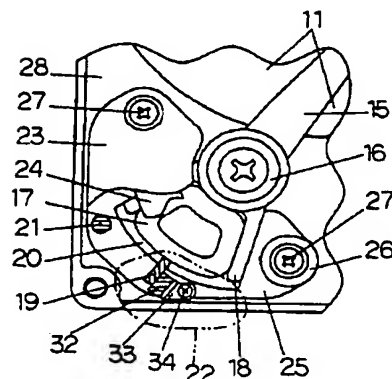
- 25 下ヨーク
- 26 スタッド
- 32 ロック磁石 (永久磁石)
- 33 ロックヨーク
- 36 ダンパー
- 42A アクチュエータスパーサ
- 42B アクチュエータスパーサ
- 46 開口部
- 47 アクチュエータクランパー
- 52A HGA UP (ヘッド・ジンバル・アッセンブリ・アップ)
- 52B HGA DOWN (ヘッド・ジンバル・アッセンブリ・ダウン)
- 53 ジンバル部
- 61 シッピング領域
- 62 シッピング領域

【図1】



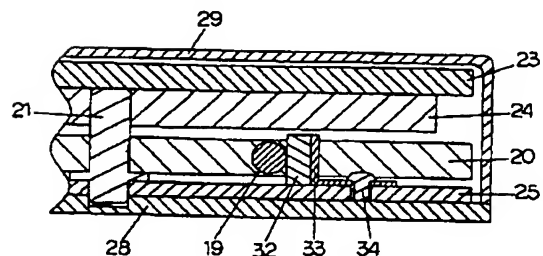
- | | |
|-------------|-----------------|
| 11 ディスク | 20 モールド部 |
| 12 スピンドルモータ | 21 外周ストッパー |
| 13 クランパー | 22 アクチュエータロック機構 |
| 14 トランスデューサ | 23 上ヨーク |
| 15 フレキシャー | 24 磁石 |
| 17 コイル | 25 下ヨーク |
| 18 コイルホルダ | 26 スタッド |
| 19 磁性ピン | |

【図2】

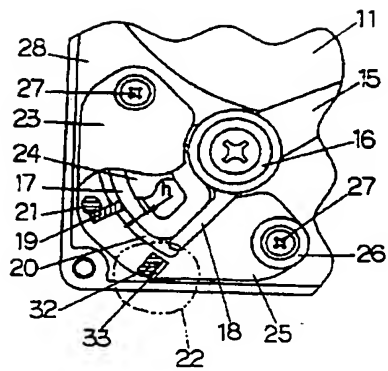


- 32 ロック磁石 (永久磁石)
- 33 ロックヨーク

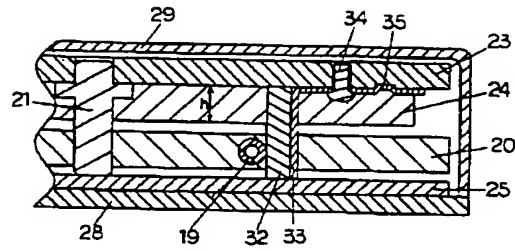
【図3】



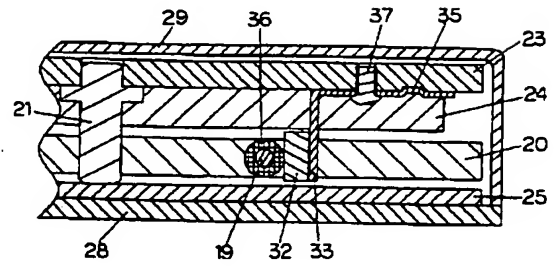
【図 4】



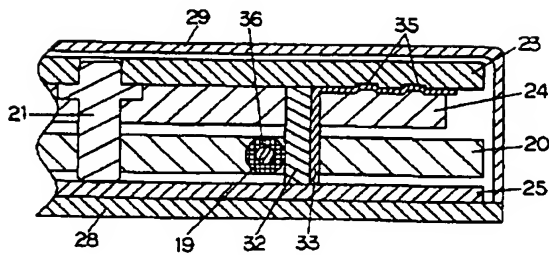
【図 5】



【図 7】

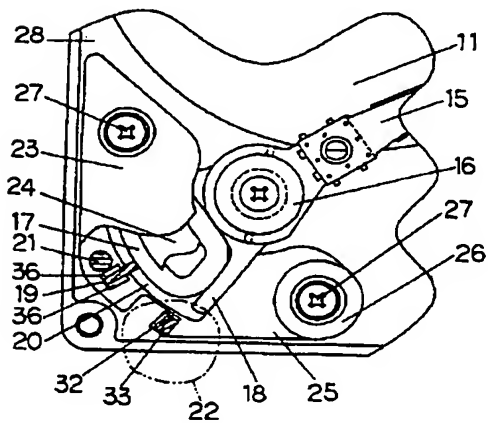


【図 6】

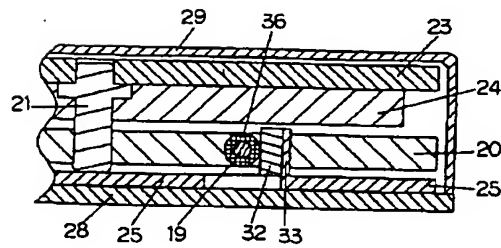


36 ダンパー

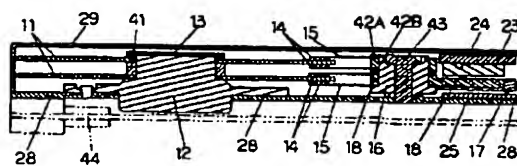
【図 8】



【図 9】



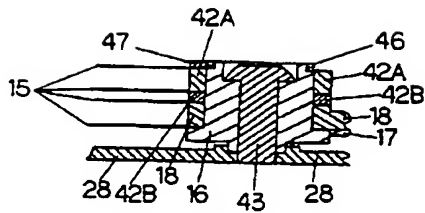
【図 10】



42A アクチュエータスペーサ

42B アクチュエータスペーサ

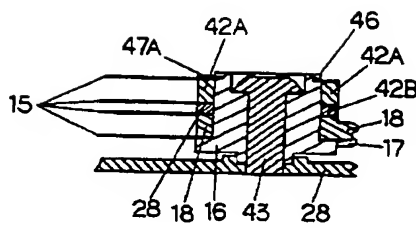
【図11】



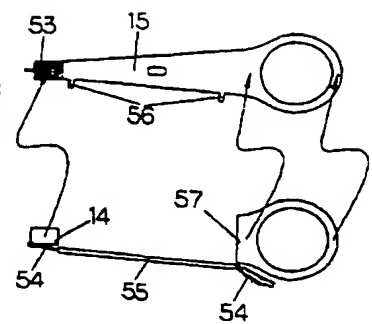
46 開口部

47 アクチュエータクランパー

【図12】

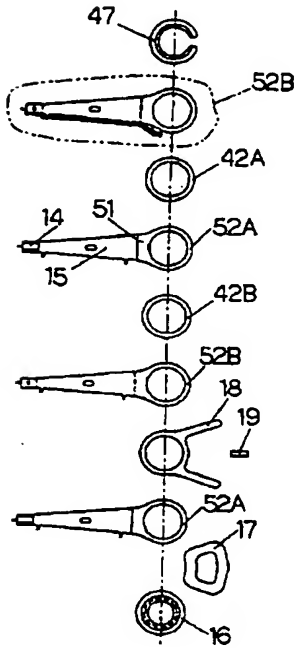


【図14】



53 ジンバル部

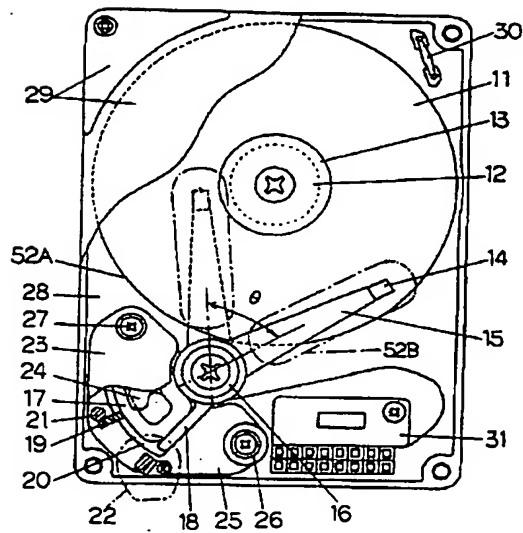
【図13】



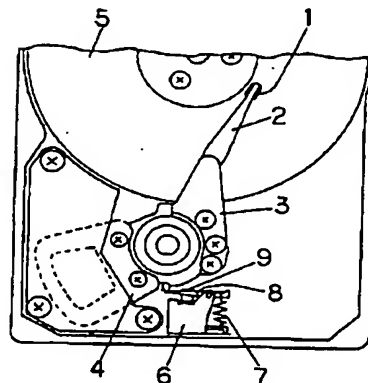
52A HGA UP (ヘッド・ジンバル・アセンブリ・アップ)

52B HGA DOWN (ヘッド・ジンバル・アセンブリ・ダウン)

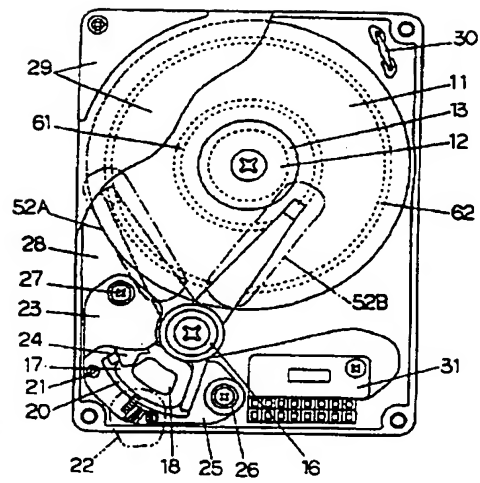
【図15】



【図18】



【図16】



- 61 シッピング領域
62 シッピング領域